

「シメオンという人」(ルカ二・二五〜三五)

1 年の終わり

今日は二〇一八年最後の日曜日、過ぎ行く年を振り返り、来たるべき新しい年をすぐそこに見ながら礼拝をささげています。

この年の瀬にのぞんでいろいろの考えが、私の、あるいは私どもの思いを行き交います。

その一つは、この、年の終わりにしても、始まりにしても、いつもと同じ、それは一日一日の時間の経過にすぎないであって、そこに何の特別の意味はないという、醒めた思いです。

じつさいそうではないでしょうか。けれどもなぜか私どもは特別な時間に突入したような気持ちになってしまいます。年明けて数日もすればもとに戻るわけですが、今のときばかりは、来年はいいことがあるような、今をみなリセットできるような思いにかられます。旧約聖書の、ソロモンの作とされるコヘレトの言葉には、「太陽の下、新しいものは何もない」(一・九)という有名な言葉があります。彼の見方はこうです、「かつてあったことは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる」。「太陽の下」、つまりこの地の上で営まれている、われわれ人間の織りなす歴史については、そうした冷静なものの方、それに基づく知恵に、私どもはつねに学ばなければならないと思います。

年の終わりと始まりは、いま言ったように、この地上で起こることはいつも同じこと、そのくり返しであることは間違いないのですが、それでも、そうした同じことのくり返しの中で、時間だけは確実に進んでいるということ、年の交替は私どもに告げています。

それを前提にした典型的なイベントがカウンドダウンなるものです。テレビでよく見ます。いろんな国で、あるいは場所で、大勢が集まって、三、二、一と数えて、盛り上がり上がっています。爆竹を鳴らし、ヨーロッパでは花火を上げる習慣があります。大きな音で悪魔をびつくりさせ退散させる意味があると聞いたことがあります。いずれにしても時間の経過を秒単位で数えるのです。そういうことはふだんの生活ではほとんどありません。時間の進行を体験するのです。年末と年始は、私どもに、時間がそうして進んでいることを自覚させるのです。

コヘレトが言ったようにたしかに新しいものは何もないのかも知れません。しかし厳密に考えれば、同じものは二つとないのです。二度とないのです。この瞬間は、さっきの瞬間ではありません。過去と現在とはつきり異なります。未来をとりくずし、それをたえず過去にして現在があります。こうして時が進むというのを年の終わりと始まりにあたって私どもは知らされることとなります。ゴルヴィツァーという戦後ドイツの著名な神学者は、あるところで、そのことを、われわれは、年末になって、じつは目標に着いたのではなくて、つねに旅の途上にあることを思い知らされるのだと言っています。

さてそうであるならこの時間が進んで行くことを、時間の中での人生の旅路を、私どもはどのように受けとめたらよいのでしょうか。この問いはこう言い換えてもよいと思います。時間が進んで行くその先は何なのかと。どこへ私どもは向かっているのかと。使徒パウロはこう申しました、「私たちの救いが、はじめ信じた時よりも、もっと近づいている」（ローマー三・一一、口語訳）と。時間が進むということは世の救いが近づいてくることだと使徒はいうのです。近づいているのは、夜の闇ではなくて、明るい日の光だということです。

しかし前にあるのが明るい光だとしても、そこへと進んでいく私どもの現在の人生の旅路には、悲観的な材料に事欠くことはありません。悩みと苦しみの渦中で暗やみしか見えないことも少なくないのです。けれどももし私どもが向かっているのが、いや私どものほうに近づいているのが救いなのだということを御言葉から私どもが知るならば、信じるならば、私どもは、気持ちのもっとも深いところで、一番深いところで、前方に対して望みを失わず、「約束された」救いを「受けるため」の忍耐（ヘブライ一〇・三六）をもちつづけて歩むことができるのではないのでしょうか。

2 シメオンという人

夜の闇に向かつてではなく、日の光の中に私どもは向かっているのだ、救いが私どもに近づいているのだと、いま申しました。それを身をもって知った人、人生の終わり近くになって知らされた人、それがシメオンという人です。

そのときに、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが霊に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た（二五〜二七節）。

当時イスラエルの人びとは救い主を、油注がれた者という意味の言葉でメシアと呼んでいました。いまもそうです。メシアが来られることを待つその姿勢は、もちろん一様ではありませんでした。中には、そういうものに来られては困ると考えていたヘロデ王のような人もいたのです。

しかしここに出て来るシメオン、もう一人、今日の聖書のすぐ後に出てくるアンナという女性（三六節）など、イスラエルの律法に忠実に生きて、メシアをひたすら待ち望んでいる、信仰あつい人びとが少なからずいたのです。昔の映画「ベンハー」にもシメオンやアンナが登場していたような気がするのですが、うる覚えで正確ではありません。アンナは八四歳と書いてあります。シメオンは年齢不詳です。老人とも書いてありません。前後関係からやはり老人であって、映画でも絵画でもそのように描かれています。

聖書はシメオンを、ひたすらメシアを待ち望んで生きてきた人、そしてそのまま年をとった人と語っています。彼は待つ人、待つことをやめない人でした。待つというのは、ここに、こちらに、救いがないということ、向こうからの救いを切実に期待するということです。

彼のこうした待望と忍耐は何に基づくものであったのでしょうか。彼個人の性格の強さというようなものではありません。そうではなくて、何よりも、聖書の言葉に基づいて、待ち望んでいたのです。「イスラエルの慰め」という言葉は預言者イザヤのもので、神の約束でした(四〇・一、他)。この神の言葉とその約束を信じて、シメオンも、アンナも、そしてイスラエルの民もみな、メシアとその救いを長く待望してきたのです。シメオンが「正しい人で信仰があつい」といわれるは、そのような神の約束の言葉に、堅くよりすがること、明らかに現れ出ていたといつてよいと思いません。

彼の待望はそれだけではなく、「聖霊」の導きによるものでもありました。この箇所にも聖霊が出てきます。聖霊とは私どもに個人的に働く神の力です。したがって彼は神によって心深く示され、自ら確信することがあったのです。聖霊に導かれてイエスとの出会いを果たします。

すでにそのころメシアを待つことをやめてしまったというイスラエルの民は少なくありませんでした。まだ待っているというのは、わずかな人々しかいなかった。この少数の者たちは、周りのほとんどの人がとうに止めてしまっているのに、それにもかかわらず待つていたということです。実現が予感されるし何も現れない、したがってシメオンやアンナのような老人はあざけりを受けるだけです。彼らは内面の戦いをへているはずで、彼らの信仰はそうした内と外からの多くの試みに屈せずに貫かれてきたのです。

3 今こそあなたは

シメオンは待つ人でした。待つことをやめない人でした。しかし今日の箇所が明らかに示し、私どもが聞かなければならないのは、彼のメシア待望は空しく終わらなかつたということです。彼は神の約束の成就を見た人であり、イエスがメシアであると始めて証しした預言者です。

シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」(二八〜三二節)。

マリアとヨセフが初子であるイエスを律法の規定に従い神にささげるために神殿に來たのと、シメオンが神殿の境内に入ったのは、同時でした。まことに聖霊の不思議な導きです。

老シメオンは約束の成就を見た人です。どこで見たのでしょうか。イエスを抱いてきたマリヤとヨセフから引き継いでイエスを抱いたときです。それを証しする言葉があります。

今日の箇所最初の節、二五節に「待ち望み」という言葉が出てきます。そのまま訳せば「前もって受け入れる」です。二八節にも同じ言葉が出てきます。「幼子を腕に抱き」の「抱く」です。これも「受け入れる」という同じ言葉です。前もって、見ずして受け入れていたものを、今受け入れる。「今こそ、あなたは」約束の実現を見せてくださったのです。

こうしていまシメオンがその腕の中に受け取った幼子イエス、「山鳩一つがい」とか「家鳩の雛二羽」（二四節）しかささげられなかった貧しい、しかし信仰深い家庭に生まれたこの赤子こそイスラエルの慰めであり、主の与える救い主であると示されたのは、聖霊の不思議な導きによるものでした。シメオンは、この幼子イエス・キリストに、その貧しさの一切の外観に逆らって、神の、すべての人に与える救いを見たいのです。

救い主は生まれた。律法の時代は終わった。精進して掟を守り、忍耐して待ち望む時は終わった。救いの時が来た。これから何が自分を待ち受けていようと、もう不安はない。今より後ただ平和が、やすらぎが、彼を支配するのです。シメオンはただ感謝し、礼拝し、ほめたたえるだけです。シメオンの賛美の歌は「今こそあなたは」と始まります。「今こそあなたは・・・この僕を安らかに去らせてくださいます」。「去らせてくださる」というのは、死ぬことができるということでしょう（ルター）。つらい長い待望の時は終わった。いずれにせよ、「今こそ」です。目標に着いた。それより先のどこかに、それ以外の何ものかに、救いと助けを求める必要は、もはや彼には、そして私どもにもないのです。

そうすると、はじめに申し上げた一人の神学者の言葉はもう少し正確に言わなければなりません。たしかにこの年末において、私どもは目標に着いたのではなくて、なお旅の途上であることを知る、その通りです。まだ時間はつづいていくからです。人生の旅は続きます。しかしこの旅は、見知らぬところへと向かうのではありません。そうするとこれは帰る旅でしょうか。そういうこともあるいは言えるかも知れません。本国は天にあるのですから。

いずれにせよ私たちの人生の旅路は救いがすでに来たことを知り、信じ、それにあずかった者たちのそれです。私どもはすでに神の子です。しかし自分の栄光の姿がどのようなものであるかはまだ示されていません（「ヨハネ三・二」。「すでに」と「いまだ」の間に私どもの人生の時間はあるのです。重要なのは「すでに」です。すでに救い主が現れた、すでに救われている、その事実^に立って歩む。鉢巻きをしてがんばる歩みではない。つねに喜び、神の自由にあずかり、それゆえユーモアを失わず、安らかに歩む、それが「すでに」から生きる私どもの歩みにほかなりません。

(二〇一八年一月三〇日)